

令和元年度 後期 南中学校学校評価資料

1月作成

中期目標 a 「授業力向上」について
 ○短期経営目標 ◇取組状況 ※成果 ●課題

評 価 **B**

○生徒目線に立った「南中学習スタンダード」を定着させ、「聞く力」を伸長することで、「学び合い」の質を高める。

方策1 南中学習スタンダードを意識した授業実践に計画的に取り組み、「聞く力」に重点を置いて授業実践を振り返る。

①教師アンケートの結果

問7. 発言者の方を見て話を聞くように指導していますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|-------|-------|
| あてはまる | 10.7% | 23.6% |
| まあまああてはまる | 42.9% | 50.0% |
| 合 計 | 63.6% | 73.6% |

問8. 自分の考えと友だちの考えを比べる場面を授業の中に設定していますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|-------|-------|
| あてはまる | 10.7% | 10.8% |
| まあまああてはまる | 50.0% | 52.6% |
| 合 計 | 60.7% | 63.4% |

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

※南中学習スタンダードの中でも「聞く」ことを重点に掲げて指導を行ってきた。前期と比較して教師のアンケート結果には改善が見られた。教師の意識の向上につながるように「授業メモ」等ではたらきかけてきたことの成果が現れてきたといえる。

※前期に課題としてあげた「授業の中に自分と仲間の考えを比べて聞く場面をどのように設定するか」については、全体研授業で様々な提案がされたことにより、今後の実践に見通しをもつことができた。

●次年度からの取組に向け、引き続き生徒の「聞く力」が向上するよう、公開授業、研修等を通じて教師の力量の向上を図っていく。

②生徒アンケートの結果

問7. 考えを伝え合う場面で友だちが考えを発表するときは、友だちの方を見て発言を聞いていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|-------|-------|
| あてはまる | 35.7% | 28.3% |
| まあまああてはまる | 46.4% | 51.6% |
| 合 計 | 82.1% | 80.0% |

問8. 考えを伝え合う場面では、友だちの発言と自分の考えを比べて聞いていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|-------|-------|
| あてはまる | 31.7% | 25.7% |
| まあまああてはまる | 39.4% | 43.1% |
| 合 計 | 70.1% | 68.8% |

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

③保護者アンケートの結果

問12. お子さんの学級は、授業中、はじめのある学級だと思いますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|-------|-------|
| あてはまる | 15.4% | 15.6% |
| まあまああてはまる | 57.0% | 53.7% |
| 合 計 | 72.4% | 69.3% |

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

※生徒の意識に大きな変化は見られなかったが、役職者が担当する「授業メモ」を「窓」と改題し、これまでの教師向けから生徒向けに内容を変更したことにより、指導者側が期待することを生徒に直接伝えることができるようになった。

※保護者アンケートの結果からは、授業の様子については、概ねよい印象をもっていることがわかる。授業での生徒のよい姿を保護者にも積極的に発信することで、さらなる理解を得られるようにする。

●上記「窓」は年度途中の変更であったこともあり、十分な活用が図れなかった。教師と生徒が同じ目標に向けて授業に取り組んでいくことができるように、年度初めから有効に活用していく必要がある。

③授業参観シートの集計結果

| 評価内容 | Aの割合 (%) | |
|-------------------------------|----------|------|
| | 前期 | 後期 |
| 南中学習スタンダードが身につくよう、適切な指導をしているか | 30.8 | 42.9 |
| 互いにかかわり合ったり、学びあったりする工夫があったか | 53.8 | 66.7 |
| 学習内容に応じた学習形態を工夫していたか | 61.5 | 66.7 |

教師の相互評価
 A評価 70%以上
 A評価 50%以上

※授業参観シートの集計結果からは、各評価内容について大きく伸びたことがわかる。これは、年間を通して継続的に必要性を伝え続けたこと、3回の全体研授業を通じて部会での話し合いや協議会で評価に関わる点を取り上げられたことが、各教員の意識に反映していると考えられる。

●工夫した授業という点では、昨年度比較しても増えてきている。ただし、学習形態と学習内容がマッチしていなかったり、教員間の取組に差があることも認められる。全体的な底上げを、今後いっそう図っていく必要がある。

方策2 主題研の4部会毎に「学び合い」の視点で主題に沿った単元を構想し、授業実践する。

◇主題研全体授業

- 7月 8日 (月) 工藤諒也教諭
3年6組 国語「言葉を見つめる『俳句の可能性』」
全体会講師 刈谷南中学校 中村友一教諭 (刈谷市教科指導員)
- 11月15日 (金) 清水和也教諭
3年5組 理科「モーターが回る？回らない？謎の水溶液の解明」
全体会講師 愛知教育大学 教授 平野俊英先生
- 12月 4日 (水) 浜田真衣教諭
2年5組音楽「曲想にあった表現を工夫しよう 花の季節で空駆ける2の5」
全体会講師 安城市立桜林学校 伊吹巧実教諭 (安城市教科指導員)

◇公開授業 5月～7月 14本 実施 9月～12月 32本 実施

※後期に2本の全体研授業を実施した。授業作りの過程で各部会が中心となって指導案検討を重ねる中で、「学び合い」のある授業についての見識を深めることができた。

※本年度より立ち上げた研究の4部会については、前期は十分に機能できなかったが、後期は部会の長を中心に熱心に授業作りに取り組み、教師の「学び合い」の場となった。

●研究初年度であり、研究の方向性がなかなか定まらなかったが、各教員の自由で意欲的な実践を引き出した。次年度からは研究主題に沿って検証に耐えうる実践を積み重ねていく必要がある。

方策3 授業参観者用シート、「授業だより、授業メモ」で南中のめざす授業を示し、相互参観・執筆を通じて授業力を高める。

※「授業だより」「授業メモ」(年度途中より「窓」と改題)は、授業力向上のツールとして定着しており、また、南中のめざす授業を職員が共通理解する上で役立っている。

※新任2名と3年目の教員にも執筆を担当させたことで、授業を観察し分析する力を育てたいと考えた。教務主任が行う初任者研修とリンクさせて参観、執筆を行うことで授業力の向上につながっている。

●全教員に配布しているが、それを利用して研修を行うなど、さらに有効な活用方法があるのではないかと考える。次年度以降、取組を広げていく。

方策4 目指す生徒像を教員と生徒が共有して授業に臨むことができるように、「手引き」を作成して浸透を図る。

※「窓」については、生徒向けの内容とし、教室掲示をして生徒にも南中の目指す授業での姿を共有できるようにした。学級経営に役立てようとする教員も見られ、発行したことの成果が現れつつある。

公開授業ごとに教室に「窓」が1部用意され、クラス掲示している。自分自身も掲示当初は朝の会などで触れていたが、最近では疎かになってきた。また、朝の会も連絡などで伝えることが多く、なかなか改まって触れるタイミングが難しいと思っていた。そこで、最近では授業だよりに「本学級にも取り入れてほしいこと・意識してほしいこと・参考になること」をマーカーで強調するようになった。校長先生の「窓」はそのようなことが太字になっているので、その部分をマーカーで強調して掲示するようになった。太字になっていない箇所も自分なりに読んで、マーカーで強調するか判断するようにした。また、朝の会でもその強調した部分を中心に、少しでも本学級の授業の受け方がよくなるように触れるようにした。 【職員の「週案」の記述より】

●9月から実施したことで、すべての学級を執筆の対象にすることができなかった。次年度も継続実施し、生徒が読みたくなる、生徒の励みになるものにしていく。

中期目標 b 「学級経営力の向上」について
○短期経営目標 ☆本年度新たな取組 ◇取組状況 ※成果 ●課題

評価 **A**

○級訓を核とした学級経営を行い、一人一人の個性を生かしながら、帰属意識、高い有用感を感じられる学級集団を形成する

方策 1 級訓を核とした学級の「仲間づくり」の様子と経過を、学級掲示に反映する。

方策 2 応援合戦、合唱コンクールをはじめ、学校生活全般において級訓を意識した取組、振り返り、評価を行う。

①教師アンケートの結果

②生徒アンケートの結果

問 13. 級訓や学級目標が達成できるように学級経営ができていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 21.1 % | 15.0 % |
| まあまああてはまる | 63.2 % | 75.0 % |
| 合計 | 84.3 % | 90.0 % |

問 13. あなたは、学級の「級訓」「目標」を意識して生活できていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 33.5 % | 15.9 % |
| まあまああてはまる | 52.8 % | 42.1 % |
| 合計 | 86.3 % | 58.0 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

③保護者アンケートの結果

問 13. お子さんは、学級の「級訓」や「目標」について話をすることがありますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 8.9 % | 4.4 % |
| まあまああてはまる | 21.9 % | 18.5 % |
| 合計 | 30.8 % | 22.9 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

※体育大会、合唱コンクールの二つの行事に取り組む中で、学級への帰属意識の高まりが見られた。教師アンケートの結果からは、級訓や学級目標を意識して指導に当たってきたことがうかがえる。

●生徒アンケートの結果から生徒の意識が大幅に低下していること、教師との意識の乖離が大きいことがわかる。教師と生徒が級訓や学級目標に立ち返り、目標を共有した上でそれぞれの行事や学校生活に取り組み、振り返ることを定着させる必要がある。

●保護者アンケートの結果からは、生徒が家庭で「級訓」や「学級目標」についてほとんど話をしない実態が浮かび上がっている。このことは、担任が何を目標として学級経営をしているかが保護者に伝わっていないことの一面を表している。学級通信等を活用し、学級と家庭をつなぐ方法を考えていく必要がある。

方策 3 不登校生徒の現状と指導方針を共有し、学校復帰、学級復帰に向けた支援をみなみ部会を中心に組織的に展開する。

①教師アンケートの結果

②生徒アンケートの結果

問 37. 要支援生徒（発達障がい・不登校・外国籍）への指導・支援を担当者（CD・SS・SC・通級担当）と協力して行っていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 21.4 % | 57.5 % |
| まあまああてはまる | 71.4 % | 55.0 % |
| 合計 | 92.8 % | 95.0 % |

問 16. あなたの学級は、生活しやすいですか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 47.8 % | 38.9 % |
| まあまああてはまる | 37.4 % | 46.4 % |
| 合計 | 85.2 % | 85.3 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

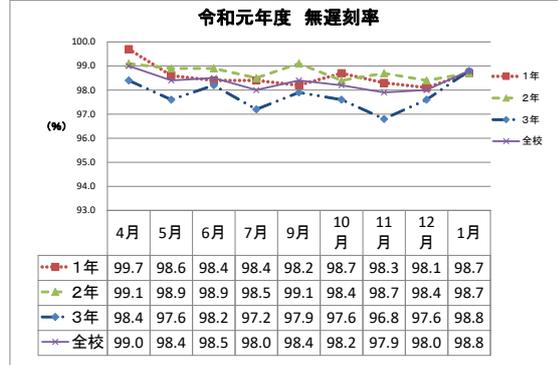
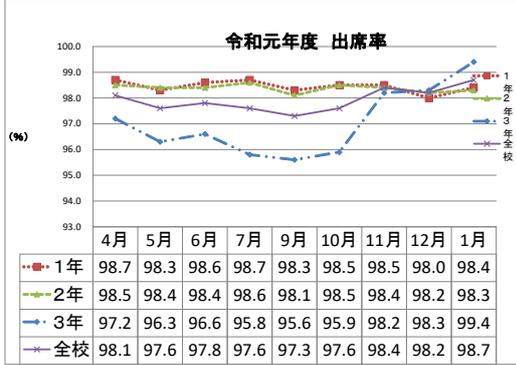
③保護者アンケートの結果

| 問 16. お子さんの学級は、生活しやすい学級だと思いますか。 | 前期 | 後期 |
|---------------------------------|--------|--------|
| あてはまる | 27.5 % | 30.8 % |
| まあまああてはまる | 59.9 % | 54.6 % |
| 合計 | 88.4 % | 85.4 % |

| 問 22. お子さんの学年は、生活しやすい学年だと思いますか。 | 前期 | 後期 |
|---------------------------------|--------|--------|
| あてはまる | 25.4 % | 23.5 % |
| まあまああてはまる | 62.2 % | 60.2 % |
| 合計 | 86.6 % | 83.7 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

③令和元年度4月～12月末までの欠席率・無遅刻率



出席率・無遅刻率 A: 98パーセント以上 B: 97%以上 C: 96%以上 D: 96%未満

◇9月～1月 出席率 98.0% (97.7%) 無遅刻率 98.2% (98.4%) (4～7月)

◇不登校の状況と対応

12月末現在、病気以外の理由で不登校傾向にあるとして、教育委員会に報告している生徒の内訳

1年生・・・6名 2年生・・・3名 3年生・・・13名 合計21名 (内13名は30日超)

生徒数600名に対する割合 3.5% (年度途中の数値であることに注意)

※みなみ部会 (不登校対策の校内組織) を中心に対応と対策を話し合い、担任や学年に対応についての提案や助言を行ってきた。また、みなみ教室、通級教室、市の適応教室 (ホットスペース) への通級の適否を検討してきた。担任が一人で抱えることなく対応できるような校内支援の体制ができつつある。

※学級、学年を「生活のしやすさ」の点でみると、生徒、保護者とも満足度が高いことがアンケート結果からうかがえる。年2回の「生活アンケート」の実施、それを元にした教育相談を行っていること、日常的にいじめや学級、学年の諸問題を担任、学年担当が把握、指導していることの効果だといえる。

※前期と比べ出席率が上昇したことは、不登校を出さないために、担任を中心に家庭訪問や夕方登校などで丁寧に対応してきたこと、居心地のよい学級づくりをしてきたことの成果であるといえる。

●不登校の原因が多様化する中で、より専門的な知見が要求されている。個々に応じた対応ができるよう、研修を充実させる必要がある。学校、教室復帰には時間的にも労力的にも多大な負担があることを踏まえ、外部機関との連携も視野に対応のあり方を幅広く考えていく。

☆特別な支援を要する生徒への支援・指導体制の確立・充実

方策1 通級指導のあり方を研究し、南中学校にふさわしい通級指導体制を確立する。

※本年度からスタートした通級指導教室は、9月から本格的にスタートした。現在、1年生2名、2年生1名、3年生2名が通級指導を受けている。該当生徒の安定を図るだけでなく、職員会議の中で通級指導担当教員が現情報告を行うなど、職員が共通理解できるような取組も行っている。通級指導教室は、本年度の取組により軌道に乗ったといえるので、次年度からは特別支援コーディネーター、通級指導担当教員を中心により効果の上がる指導・支援を行っていく。

方策2 外国籍生徒の現状を把握し、市通訳、SSを活用しながら困り感にきめ細やかに対応する。

※11月にブラジルから日本語が全く理解できない生徒が転入するなど、混乱が生じかねない状況があった。SSと協力しながら指導・支援に当たる体制ができおり、スムーズに受け入れることができた。

※3年生に3名の外国籍生徒 (ポルトガル語2名、中国語1名) が支援を受けているが、進路選択にあたり面接や作文の練習を行うなど、適切な対応ができた。

●生徒の実態 (日本語力、生活力、学力) の把握が十分ではないため、指導・支援の内容がSSに委ねられがちな面がある。SSと担任、教科担当が定期的に情報交換する場を設けるなど、連携を密にするための方策を講じていく。

| | |
|--|-------------|
| 中期目標 c 「集団の中で、生徒自身が課題を発見し解決する力」について ○短期経営目標 ☆本年度新たな取組 ◇取組状況 ※成果 ●課題 | 評価 B |
|--|-------------|

○「生徒自治」の精神を継承し、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会と場を保障する。

方策1 外部団体、小学校と連携したリーダー研修会を運営し、部長会へつなげる。

※8月21日、22日の2日間にわたり愛知県青年の家において、2年生の生徒会役員、室長、部活動正副キャプテンら38名が参加してリーダー研修会を実施した。また、2日目には校区内3小学校より各8名計24名が合流し、中学生と一緒に研修に参加した。本年度も、本研修の趣旨に賛同いただいた高取まちづくり協議会、南部まちづくり協議会、高浜ロータリークラブよりご寄附をいただき、NPO法人アスクネットの協力のもと実施することができた。本研修では、目的である「仲間と関わりながら様々な活動を推し進めることができる『実行する力』をもったリーダーの育成」を意識しながら、5つのワークに取り組みリーダーとしての資質や自覚を高めることができた。(前期の内容の再掲)リーダー研修参加者が生徒会や学年、学級を中心となって活躍する姿が見られる。

時間が経過するにつれ、だんだんと自分の意見が言えるようになった生徒が多く見られた。キャプテンだと、学級のリーダーとして出てこない生徒もいて、その生徒ははじめ自信がなくどうしたらわからない様子だったが、自分のできることを精一杯やっている姿が見られた。【研修の振り返りより】

●担当者(2年)から職員に対して、機会を捉えてリーダー研修会の成果を「生徒自治」に還元する具体的な提言をするように促してきたが、十分な成果を上げることができなかった。「生徒自治」の核となる行事であることを再確認し、特別活動の年間計画に位置づけるなどして成果につなげていく。
 ☆これまでの取組の成果と課題を検証した結果、次年度のリーダー研修会「中学生のみ」で実施することとする。

方策2 生徒議会・生徒総会を実施させ、室長会や委員会の生徒と生徒会役員の連携を図る取組を取り入れる。

①教師アンケートの結果

②生徒アンケートの結果

問 21. 生徒会の諸活動に生徒が参加できるように積極的な呼びかけや働きかけはできていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 14.3 % | 16.2 % |
| まあまああてはまる | 53.6 % | 69.6 % |
| 合計 | 67.9 % | 85.8 % |

問 21. 南中祭では、委員会の活動や有志の活動に積極的に参加しましたか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 22.5 % | 34.2 % |
| まあまああてはまる | 34.5 % | 24.1 % |
| 合計 | 57.0 % | 58.3 % |

◇委員会には全校の約4割250名が所属

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

※生徒会活動については、常時活動としての委員会活動がやや低調になってきているという観点から、生徒会担当から本年度のプロジェクト活動は、有志ではなく委員会が主体となって行うことが提案された。年度途中の変更ではあったが、限られた一部の生徒が計画・運営、参加するのではなく、全生徒が何らかの形で関わることができるようにしたいという担当者の意図が職員、生徒にも浸透し、次年度以降につながる取組となった。【参考資料：PTA新聞「南風」第131号】

方策3 「ファシリテーション」の技能を生かし、生徒の自治活動やグループ活動の支援に生かす。

①教師アンケートの結果

②生徒アンケートの結果

問 29. 個々の生徒やチームに目標を持たせて活動できるように支援・指導ができていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 17.9 % | 20.0 % |
| まあまああてはまる | 71.4 % | 65.0 % |
| 合計 | 89.3 % | 85.0 % |

問 29 自分やチーム(部活動)の目標をもって活動していますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 59.1 % | 49.4 % |
| まあまああてはまる | 27.0 % | 34.7 % |
| 合計 | 86.1 % | 84.1 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

③保護者アンケートの結果

問 29. お子さんの所属する部活動は、目標を持って活動していると思いますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 41.2 % | 33.3 % |
| まあまああてはまる | 41.9 % | 45.2 % |
| 合 計 | 83.1 % | 78.5 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

※アンケート結果からは教師、生徒ともに目標を設定した上で活動ができていることがわかる。また、保護者にもこうした取組が伝わっていることがうかがえる。

●生徒アンケートの問 13 の分析でも触れたが、主目標の達成に向けた段階的な目標の設定ができているか、および振り返りが確実にできているかという点については、検証ができていない。特に教師については、「ファシリテーター」としての役割の視点から結果を見ることができるようになっていく必要がある。

方策 4 学年目標の達成に向けて室長会を運営し、決定した諸取組を学級へと広げていく。

①教師アンケートの結果

問 23. 担当する学年は、室長会を中心とした活動ができるように指導されて（指導して）いますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 25.9 % | 43.7 % |
| まあまああてはまる | 59.3 % | 50.0 % |
| 合 計 | 85.2 % | 93.7 % |

問 24. 担当する学年は、室長会の呼びかけや活動に積極的に参加できるように指導されて（して）いますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|--------|
| あてはまる | 18.5 % | 35.3 % |
| まあまああてはまる | 74.1 % | 64.7 % |
| 合 計 | 92.6 % | 100 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

※3学年とも室長会が随時行われており、室長を中心に学年を動かすという意識も実績も満足できるレベルである。また、生徒の手に委ねられている面も多く見られ、リーダーを養成するという点からも効果を上げている。

●学年目標（さらに言えば学校目標）を踏まえた諸活動の目標設定ができているかという点については、次年度以降の検証の視点に加えていく必要がある。

○地域と協働してまちづくりに貢献することで生徒の自己有用感を高め学校と地域の連携強化を図る

方策 1 美化委員会、生徒会が、街路樹ボランティア活動、防災訓練を計画運営・参画する。

①教師アンケートの結果

問 32. さまざまなボランティア活動に生徒が参加できるように積極的に呼びかけや働きかけをしていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 7.1 % | 11.7% |
| まあまああてはまる | 57.1 % | 61.7% |
| 合計 | 64.2 % | 73.4% |

問 33. 生徒がボランティアの意義を理解し、与えられた活動以外にも自ら活動に向かうように指導していますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 3.6 % | 2.9% |
| まあまああてはまる | 53.6 % | 50.0% |
| 合計 | 57.2 % | 52.9% |

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 (D) 59%未満

②生徒アンケートの結果

問 32. 様々なボランティア活動に参加しよう、参加したいという気持ちはありますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 28.8 % | 37.5% |
| まあまああてはまる | 37.6 % | 34.3% |
| 合計 | 66.4 % | 71.8% |

問 33. ボランティア活動に参加したことはありますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 68.5 % | 71.2% |
| まあまああてはまる | 14.7 % | 17.0% |
| 合計 | 83.2 % | 88.2% |

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 (A) 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

※街路樹ボランティア・親子除草作業への生徒の参加状況
 街路樹ボランティア (5月26日<日>実施) 参加生徒数 330名 参加率 56.4%
 親子除草作業 (8月25日<日>実施) 参加生徒数 433名 参加率 74.0%
 街路樹ボランティア (11月17日<日>実施) 参加生徒数 約400名 参加率約66.0%
 A: 全校生徒の60%以上 (B): 50%以上 C: 49%未満

方策 2 資源回収収益金の使い道を決めるとき、地域への貢献方法を考えさせる取組を試みる。

※本年度は、部活動単位で地域貢献活動を考え、申し出の合った部活動に対して収益金の配分を決定した。吹奏楽部が地域の園で演奏活動、バスケットボール部が校区内小学校でバスケットボール教室を企画、バレー部がシティマラソンのボランティアスタッフとして参加、ソフトテニス部女子が市制50周年記念行事に参加するなど、活動に広がりが見られた。
 ●次年度は、生徒が地域貢献活動により参加できるように、地域との情報交換を密にするとともに、活動したことを積極的に発信し、地域への理解促進と生徒の成就感につなげていく。

方策 3 スマホ対策、リーダー研修会において地域と協働する機会を継続する。

◇スマホ対策については、今年度も入学説明会の折に保護者、3年生生徒を対象にした講演を予定している。本年度も南部まちづくり協議会から補助をいただき、講師を招聘する。

方策 4 ホームページ、ブログ等で学校の方針、活動のねらいと生徒の様子を積極的に情報発信する。

①教師アンケートの結果

問 34. 保護者や地域の方が見たくなくなるような情報をHPやブログに載せていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 7.1 % | 8.8% |
| まあまああてはまる | 28.6 % | 23.5% |
| 合計 | 35.7 % | 34.3% |

②生徒アンケートの結果

問 35. 学校だよりを家の人に見せていますか。

| | 前期 | 後期 |
|-----------|--------|-------|
| あてはまる | 58.2 % | 52.2% |
| まあまああてはまる | 20.6 % | 19.5% |
| 合計 | 78.8 % | 71.7% |

③保護者アンケートの結果

| | | |
|------------------------------|--------|--------|
| 問 34. 学校のホームページやブログを見えていますか。 | | |
| | 前期 | 後期 |
| あてはまる | 27.4 % | 22.7 % |
| まあまああてはまる | 32.2 % | 32.3 % |
| 合計 | 59.6 % | 55.0 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

◇ブログ閲覧者数(4月～1月) 1日平均

A: 1日平均200以上 B: 100以上 C: 100未満

【参考】修学旅行期間中平均728人 オリ合宿中平均 377人 体育大会当日 295人 南中祭当日 179人

- 発信者側の意識の低さが、受け手である保護者の閲覧状況の低さに結びついているといえる。今後、ホームページが一新される予定があることから、それに併せて情報発信のあり方(内容、頻度、周知方法等)を見直していく。
- 生徒アンケートの結果からは、紙媒体の「たより」等は高い割合で保護者に渡っていることがわかる。媒体の特性に応じた情報の発信を考えていく必要があるといえる。

☆ 勤務時間縮減に向けた取組の推進

方策1 業務改善委員会を立ち上げ、職員自らが業務を見直し、削減、縮減の提案をする。

◇第1回の業務改善委員会を夏休み前に開催した。職員に対するアンケート結果からは、業務の見直しの意識は見られるものの、組織としての視点をもって行動するには至っていないことがわかる。まずは業務改善委員会の役割を職員に浸透させ、機能させるようにしていくことが課題である。

教師アンケートの結果

| | | |
|---|--------|--------|
| 問 39. 在校時間縮減に向けて業務を見直し、改善につながる取組を行っていますか。 | | |
| | 前期 | 後期 |
| あてはまる | 14.3 % | 2.7 % |
| まあまああてはまる | 39.3 % | 59.4 % |
| 合計 | 52.6 % | 62.1 % |

| | | |
|---|--------|--------|
| 問 40. 在校時間縮減につながる案を学年職員、業務改善推進委員会に対して行っていますか。 | | |
| | 前期 | 後期 |
| あてはまる | 10.7 % | 2.7 % |
| まあまああてはまる | 25.0 % | 25.0 % |
| 合計 | 35.7 % | 27.7 % |

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

◇業務改善委員会 第1回 7月19日開催 提案数12件
実施回数 A: 3回以上 B: 2回 C: 1回 D: 0回
提案数 A: 20以上 B: 10以上 C: 5以上 D: 4以下

◇職員の在校時間

4月～7月 総在校時間数 280時間 (昨年度同期間 316時間)
4月～12月 総在校時間数 261時間 (昨年度同期間 272.5時間)
昨年比 平均 A: 10%以上減少 B: 10%未満減少

方策2 地域団体の代表者やPTA役員等を通じて地域、保護者に学校の実情を発信し、勤務時間縮減の取組について理解の促進を図るとともに、協働して取組を推進する。

※教師アンケートの結果からは、在校時間縮減についての職員の意識が高まりつつあることがわかる。
●業務改善推進委員会を立ち上げたが、各職員から各学年副主任へ、さらに事務長へというシステムが十分機能するには至らなかった。そのため、職員自身が提案したことを改善に結びつけることができなかった。次年度は、委員会の役割とシステムを確認した上で取組を進めていく。